

2022年10月30日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ 12章 18～27節

説教題：人がよみがえるとき

天国では何語を話すのでしょうか。ある宣教師のお祖父様は「天国ではドイツ語を話す」と信じておられたそうです。メノナイトがヨーロッパから北米に移住して来て、やがて若い世代が、ドイツ語ではなく英語を母国語とするようになった時、北米のメノナイト教会では「礼拝の言葉をドイツ語から英語に変えよう」という動きになりました。その時、「天国ではドイツ語を話す」と信じていた人達は、「『天国の言葉を捨てるのか』と言って大反対をした」ということです。天国では何語を話すのでしょうか。恐らくドイツ語ではないと思います。それは、いくら考えても、私達には分かりません。天国のことを地上の常識で理解しようとしても無理なのです。

こんな話も聞きました。地獄では何語を話すのか。ロシア(旧ソ連)も大規模なユダヤ人迫害があった国ですが…。旧ソ連(ロシア時代だったかも知れませんが)で投獄されていたユダヤ人のラビが、牢獄でヘブル語の勉強をしていました。看守が聞きました。何をしているのか。「天国に行った時のためにヘブル語を勉強しているのです—(天国ではヘブル語を話すと信じていたのでしょうか)」。看守は言いました。「お前は、天国に行くとは限らないだろう。地獄に行った時はどうするのだ」。ラビは言いました。「それなら大丈夫です。ロシア語はもう知っています」。(「地獄ではロシア語が話されている」という皮肉を込めたジョークです)。

さて、イエス様は、受難週の始まる日曜日、エルサレムに入城され、その週の金曜には十字架につかれますが、それまでの4日間、ユダヤの指導者達に数々の議論を挑まれます。ここではサドカイ人が登場して、イエスに「復活問題」を問います。権力者達は、イエスを何とか潰したい。そこで彼らの狙いは、神学的な面でイエスをやり込めて、人々の前でイエスの立場を失墜させ、人々の気持ちをイエスから離れさせる、そういうことにあったと思います。

今日も「内容」と「適用」と2つに分けて信仰の学びをして行きます。

1：内容～聖書を知り、神の力を知る

当時のユダヤ教には、色々なグループがありましたが、サドカイ人は祭司階級(特権階級)の人々です。彼らの信仰的な特徴は、「旧約聖書」の「最初の5つの本(モーセ五書)」しか、その権威を認めないということでした。しかし「モーセ五書」には「死者が復活する」という記述はない。だから彼らは、「死者の復活」を認めませんでした。「この世の生活(祝福)が全て」でした。しかしイエスは、「死者の復活」を教えられました。そこで、その点でイエスを神学的に追い詰めようとしたのです。

そのために彼らが持ち出したのが「レビラート婚」の規定でした。「モーセ五書」の「申命記」に次のようにあります。「兄弟がいっしょに住んでいて、そのうちのひとりが死に、彼に子がない場合、死んだ者の妻は、家族以外のよそ者にとついでにはならない。その夫の兄弟がその女のところに、はいり、これをめとって妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。そして彼女が産む初めの男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない」(申命記 24:5～6)。これは、家族の名前が継承されるように、家族の財産が散逸しないように、そのための決まりです。彼らはこの法を基に「7人の兄弟とレビラート婚をした女性」の譬話を持ち出します。「結局、子供が一人も生まれなくて、やがてその妻も死んでしまって、それから後に、いつの日か皆が甦るとなると、どうなるのか。地上に生きている間は、いつも一人ずつ夫になったけど、その時は目の前にかつて夫であった者が7人並んでいる。天国でこの女は誰と住むのか」。彼らは、イエスに答えを教えるに決まっています。彼らの中では、答えは決まっています。「掟に従えば一人の女が何人もの夫の妻に同時になるということは考えられない。掟に背くことになる。神の掟には矛盾がないはずなのに、矛盾が起きて来るではないか。だから神の掟は、復活など前提にされていないのだ。結局、復活などないのだ。復活を信じることは、おかしいことなのだ」。彼らはそう言うのです。

それに対して、イエスは言われます。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか」(24)。「あなた達がそんなことを言い出すのは、聖書を知らないからだ、神の力を知らないからだ」と言われるのです。

1) 「聖書を知らない」とは、どういうことか

サドカイ人は、『モーセ五書』に書いていないから復活は信じない」と言います。しかし「モーセ五書」も「復活」について語っている。「それに、死人がよみがえることについては、モーセの書にある柴の個所で、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です」(26~27)。「柴の箇所」というのは「出エジプト記3章」の「神がモーセに呼びかける箇所」です。そこで神は、ご自分のことを「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神で“ある”」(出エジプト 3:6)と現在形で自己紹介しておられます。「リビングバイブル」は、27節をこう訳します。「実際には、これらの人達は数百年も前に死んでいたのに、神はモーセに、彼らはなお生きていると教えられたのです。そうでなければ、すでに存在していない人の『神である』などと、おっしゃるはずがありません。あなたがたは、この点で決定的なまちがいを犯しています」(27 リビング・バイブル)。「旧約聖書」の他の個所には、「死者の復活に類する」記述があります。しかしイエスは、サドカイ人が認めている「モーセ五書」を用いて『死者の復活』について聖書は語っているのだ、あなた達にはそれが分らないのか」と言われたのです。

実際、もし死者の復活がないとしたら、私達の信仰は、「死」を前にして一体どんな意味を持つのでしょうか。「あの人は信仰熱心だったけど、結局死んでしまったよね」で終わりです。100年程前のアメリカに有名な2人の説教家がありました。1人はD.L.ムーディーという人、もう1人はR.G.インガソルという人でした。ムーディーは、キリスト教の説教者です。インガソルは、弁護士であり、政治家でした。2人には共通点がありました。2人とも多くの人々に影響を与えました。多くの人が2人の話を聞くために集まって来たのです。そして2人は、同じ年(1899年)に死にました。しかし違う点もありました。ムーディーは、生涯イエス様を語りました。インガソルは非常に強くキリスト教に反対し、聖書を軽蔑した人です。そのゴールはどうだったのでしょうか。インガソルが死んだ時、奥さんは夫の死を受け入れることが出来ませんでした。彼女は、葬儀も出せなかったのです。絶望に包まれた遺体は、家の中に置かれたままになっていました。衛生的な理由で、国が強制的に葬式をさせたのです。一方ムーディーは、亡くなる直前、家族に向かって叫ぶのです。「地が退き、天が私の前に現れる。今私はあまりに美しい光景を見ている。これが死だったらあまりに素晴らしい。ああ神が私を呼んでおられる。私は行かなければならない。私を引き止めてくれるな」。彼の葬儀は、まるで祝会のようなそうです。何と言う違いでしょうか。そのように、私達の信仰は、最後の勝利に繋がる信仰でなければ、それは虚しいと思います。

だからこそ私達の信仰は、復活に目を向ける信仰、地上生涯を、むしろ仮住まいと考える信仰、そのような信仰でありたいのです。それは、死に行くためだけではありません。生きるためにも大切なことです。私は良く森繁さんの話をしますが…。彼はアメリカで信仰を持ちますが、「日本人に伝道したい」と思って日本で教会を始めたのです。しかしアメリカ人の奥様は、日本の生活に馴染めなかったそうです。だんだん落ち込んで行かれました。彼は、家族のためにアメリカに帰り、「日本に一番近いアメリカ」と言うことでハワイに住みました。しかし仕事がない。ようやく見つけたのがマカデミアン・ナッツの農場で草を刈る仕事でした。もの凄く雨が降る。ずぶ濡れになりながら働くのです。彼は神に叫びました。「神様、私はここで何をやっているのでしょうか。伝道も出来ません。伝道できなければ生きている甲斐がありません」。でも、やがて彼の祈りは変えられました。「もしあなたが私にさせたいことが、ここで家族の面倒を見ることだったら、私はやります。一生でもやります」。そう祈ることが出来るようになった時、彼に与えられた印象は「神は1人ひとりにちょうど良い仕事を与え、そして神が与えて下さった事を忠実にやる時に、仕事の大小はない、天においては、褒美は同じだけもらえる」ということだったそうです。天を目指し始めた時、彼は解放されたのです。私達の生きる現実にも言えることではないでしょうか。復活の希望が、今の私達を生かすのです。日常に起こる様々な試練にも耐えさせるのです。復活を目指す信仰、それこそが、私達に、この世を前向きに生かして行く信仰、聖書の信仰なのです。

2) 「神の力を知らない」とは、どういうことか

イエス様は、サドカイ人に「あなた方は神の力を知らない」とも言われました。なぜサドカイ人が

「復活はない」と言うのか。彼らは「地上で何回も結婚した人は、復活したらおかしなことになるだろう。だから復活などないのだ」と言うのです。しかしイエスは言われました。「人が死人の中からよみがえるときには、めとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです」(25)。「めとることも、とつぐことも」という言葉は、「レビラート婚」を指す言葉のようですが、要するにイエスが言おうとしておられるのは「今の世と後の世は違う」ということです。「人の在り方も、今の世のあり方と復活の世のあり方は違う」と言われるのです。人は、今のこのままの状態を復活を、復活の世界を、生きるのではないのです。

私がある集会で「復活と永遠の命」の話をしていた時、1人の女性の方が言われました。「永遠の命ですか、疲れそうですね」。今の私達のように、様々な重荷、とりわけ罪の重荷、そして悩みや問題、そのようなものを抱えて生きて行くとしたら、永遠の命を生きるのは疲れそうですね。でも神は、そんな形では復活を与えられないのです。「天の御使いたちのようです」(25)とあります。私達は復活させられるだけではなく、その時は罪を取り除かれ、罪のない者、罪の重荷のない者として「神の御手に抱かれている天使のような存在」に変えられて、天に存在するというのです。

それでも「めとることも、とつぐこともなく」、この言葉に私達は違和感を覚えるかも知れません。というのは、地上において結婚関係や家族関係・親子関係というのは特別な関係です。この言葉を読むと「地上の家族の関係が天上ではなくなってしまうのだろうか」、そんな寂しさを覚えるかも知れません。しかし、ある牧師が病床の父親に洗礼を授けることになりました。洗礼を授ける時、父親に向かって「〇〇兄弟」と呼びかけた時、「お父さん」と呼ぶ以上の喜びがやって来たと言います。家族の交わりの喜びを超える交わりが信仰の家族として与えられるのかも知れません。しかも、神の愛を浴びるように受けてそこに存在するのです。私達は、それ以上の喜びの必要を感じないような満足を与えられるのではないのでしょうか。しかし神学者は言います。「恐らく、その上にさらに地上の家族の交わりの喜びも、私達が思い描くことができないような仕方で回復して下さるに違いない。やがて復活の世界でも懐かしい家族に再会する特別の喜びも、神はそこに添えて下さるのでしょう」。それ以上のことは、私には分かりません。いずれにしても復活の命というのは、その質において私達の考えを遥かに超えた世界なのです。神の力がそれをもたらすのです。

サドカイ人は、その神の力を知らない。だから自分の常識(地上の常識)でしか復活を考えられないのです。だからイエス様は、彼らに向かって「あなた方は神の力を知らない」と言われたのです。戦火を逃れてアメリカに難民としてやって来たアフリカの人が言ったそうです。「アメリカの人は神を知っているかも知れないけど、神にどんなことができるかを知らない」。私達は、復活の問題に関わらず、神の力を小さく考えているところはないでしょうか。神は、無から有を造られたお方です。私達も、イエス様から「そんな思い違いをしているのは…神の力(を)知らないからです」と言われないように、神を小さくしないようにしたいと思います。

2. 適用～神との関係を生きる

先程、「私達の信仰は『復活』を目指す信仰でありたい」と申し上げましたが、『復活』を目指す信仰とは、どういうことなのでしょう。

この個所の平行個所である「ルカ福音書 20 章 35 節」にはこうあります。「次の世にはいるのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません」(ルカ 20:35)。私達は「復活するにふさわしい者」と認められなければなりません。つまり『復活』を目指す信仰とは、今ここで「死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる…」ことを目指す信仰だとも言えるのではないのでしょうか。どうすれば良いのか。それはもちろん「イエス様への信仰」に依ることです。イエス様を信じることです。「それが全てだ」と言って良いでしょう。しかし、私はこのことを少し違う角度から考えたいのです。

どうして「旧約聖書」の中には「復活」についてあまり書かれていないのでしょうか。もちろんそれは、「旧約聖書」の限界だったのかも知れません。しかし、ある神学者が言っています。「旧約においては、もともとそのようなことに興味がなかったのではないか。それは『人間は死んだらおしまいだ』等と考えていたからではない。神は生きておられる。この生きた神との生きた関係の中にある、その生活を今ここで生きるならば、死んだ後のこと等については思い煩わなくて済むことを確信して

いたからではないか」。似たことを、フッタライト―(私達の親戚)―の現長老が言っています。「もし、私達が神の命令に従順に服従して生活しているなら、私達は神の恵み深い御手の内にあることは確実です。私達は、それ以上救いについて心配する必要はありません。むしろ私達は、主を畏れ、狭い道を歩こうと務めるだけです。罪と闘い、兄弟愛を実行しましょう。そうしている以上、救いに入れないうなどということが、どうしてあるのでしょうか」。

つまり「復活」というのは、もちろん死後の話ですが、しかし「永遠の命」というのは、死んでから始まる命ではありません。今ここで始まっている命なのです。神との関係の中に生き始める時、既に永遠の命を生き始めるのです。この世的に言う「死」は、通過点に過ぎません。その意味では、私達にとって大切なのは、今ここで「神とのしっかりした関係」を生きることなのです。ある聖書学者がこう言いました。「神は、神に仕え、神を愛する人に対して、その人の神であることを止めることが出来ない」。私達の神でいて下さる方は、たとえ私達の地上の命が終わろうとも、私達の神でいて下さることを止めることはなさらないのです。であれば、「神に仕え、神を愛する人に対して…」と言われているように、私達の考えることは、今ここで神に仕え、神を愛することでしょう。

神に仕え、神を愛する、色々な仕え方があります。ある人がアメリカで、朝、道を歩いていたら「モーニング・サービス」の看板があったので、「朝食でも」と思って中に入ったら「教会だった」という話があります。礼拝のことを英語では「サービス」と言います。礼拝もサービス(仕えること)なのです。以前「礼拝は、神が私達に仕えて下さる場だ」と申し上げましたが、もちろん逆も言えます。私達が礼拝を捧げることによって神の栄光が現れるのです。もっと言うと、ある牧師は「神を愛する方法、それは神を礼拝すること、それ以外にありません」と言い切っています。私達も礼拝を大切にしたいと思います。

しかし、聖書はまた言います。「愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全とうされるからです」(ガラテヤ 5:13~14)。「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように心から行いなさい。あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです」(コロサイ 3:23~24)。人に仕えることを通して神に仕えて行く、それも大きな要素ではないでしょうか。こんな話があります。マルチンは、ローマの兵士でした。ある寒い日、彼が町に入ると、物乞いが彼を呼び止めて施しを求めました。マルチンは、お金は持っていませんでしたが、物乞いが真っ青な顔をして寒さに震えているのを見て、自分のすりきれた軍服の上着を取り、2つに切ってその半分を物乞いに与えました。その晩、彼は夢を見ました。場所は天国で、天使の間にイエス様がローマ兵の上着の半分を着ておられました。1人の天使が「主よ、どうしてそんな古い上着を着ておられるのですか」と尋ねると、イエス様は静かに答えられました。「私のしもべマルチンがくれたのだ」。私達が人に仕える時、その業を、イエス様が全部受けていて下さるのです。

いずれにしても、本当に神に仕えて生きようとすれば、サドカイ人のような「議論のための議論」をしている暇はありません。この生涯は1度限りの大切な生涯です。でもそれは、サドカイ人のように「この世が全て」だから大切なわけではありません。「復活」に備えるためのたった1度の機会だからです。与えられている地上の生涯を、来るべき「復活」の命に備えて大切に生きて行きたいと思いません。